

「あいつら」と言われれば

厚生省の阿部老人福祉課長が、老人に金をかけるのは枯木に水をやるようなものなどと放言したことが、いま国会で問題になっている（本紙一月二十三日報道）。当の課長は言葉じりをつかまえず、言っている全体の論調をみてほしいとだけ弁解している。

たまたま、問題の講演速記録が大分県で開かれた九州大会の資料に収録されている。彼の言うその全体の論調がまたひどい。せまい紙面を惜しみつつ、一節だけあげよう。「寝たきり老人といっているけど、みんなピンピンしているじゃないか。いろんな所へ行っている、その中で花笠音頭をやっている。あいつら何だ、と言われるんです、私は」。お年寄りをあいつらと言われて、全く同調している。こんなことは日本福祉史上空前、そして絶後のことだろう。

「日本の在宅福祉はせいぜいヘルパー制度ぐらいで、本当に動いているか疑問です」といい、ボランティア活動にまで暴言は及ぶ。「日本のボランティアはアホー」

と。自分が明らかに責任を負うべき分野について、ひとつごとのようにけなし続けていく。正常人の言葉ではない。

二十年ほど前、私が県の社会課長の時、竹田市の医師後藤基彰先生はある会合で言われた。「特養ホームの寮母やホームヘルパーの前に知事たちは土下座して感謝すべきだ」と。今もその言葉が胸にささって、任運荘の寮母を私は宝と信じて、お年寄りのおせわをお願いしている。また、県の老人大会でのこと、木下知事が演壇に進み出るまでうっかりお年寄り全員を立ちん坊させていたら、知事は厳しい目で私たちをにらんでおられた。一度だけが忘れられない教訓である。お年寄り、特に老病人を大切にしない日本なら、もう日本ではない。

無力な私にできることは、厚生省にあててその課長ヒメン要求を打電するだけであった。

(一九八六年二月十二日)